

かぐらおが

第 66 号

平成 2 年 12 月 1 日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は初代学長 山田守英氏)



(写真撮影 学生課 伊藤 茂)

つかのまの冬景色

教授就任にあたって……………奥野 晃正…… 2	留学生寄稿“旭川医科大学での生活”
着任にあたって……………松岡 悦子…… 3	アブ・ナサール・エサメル・ホーク…… 6
解剖学実習を終えて……………金子 登…… 4	研究室紹介……………法医学講座…… 7
解剖学実習を終えて……………青木 直子…… 4	研究室紹介……………皮膚科学講座…… 7
体育大会 4 年生が優勝ノ…………… 5	教官の異動…………… 8
解剖体慰霊式…………… 5	スキー教室締め切り迫る…………… 8
「公開講座」好評を博し終了…………… 5	全道学生弓道新人戦本学で開催される…………… 8
新人生研修(第 2 回目)…………… 5	窓 外……………八幡 剛浩…… 8



教授就任にあたって

小児科学講座 奥野晃正

小児科学講座の初代教授吉岡一先生が平成2年3月で退官した後をうけ、8月1日付けで就任致しました。小児科学講座が開設された昭和49年から助教として赴任しておりましたので、この度の教授就任はこれまでの仕事の継承と理解しています。私は昭和34年北大医学部の卒業で、本学細菌学の東教授と同期生です。卒後は北大第一生理の伊藤真次先生にご指導いただき、パンプレシとオキシトシンの代謝効果の研究を行いました。居心地が良かったのでセントルイス留学中も含めて5年間お世話になりました。本学第二生化学の金沢教授、第一生理の黒島教授には、その当時からお付き合い頂いています。その後は小児科に転向し、北大小児科で山田尚達先生の温顔のもとで勉強することが出来ました。最初は新生児の下垂体副腎皮質系の機能、先天性副腎過形成の血清コレステロールと尿17-KSの関係などを調べていました。やがてラジオイムノアッセイが出来るようになり、当時はあまり興味を持つ人がいなかった成長障害の研究に取りかかりました。これを契機に小人症の患者が多数集まり、後の臨床研究に役立つことになりました。

旭川医大に赴任した当時は、研究室と病室の設計から始まりました。教育カリキュラムの編成、研究室の機器と病室の設備の購入などデスクワークの毎日でしたが、よい経験でした。放射性同位元素研究室を創設するために、放射線取扱主任者の資格が必要といわれ、真夏の暑い日に東京まで出かけて脂汗と冷汗を流しながら試験を受けたことを今でもときどき思い出します。

研究は臨床に密着したものをと考え、下垂体機能障害の病態生理と思春期の内分泌環境の二つを主題としています。附属病院が出来るまでは臨床研究は無理と覚悟していましたが、ちょうど成長ホルモンが使用できるようになった年に当たり、北大時代に集めた多数の下垂体性小人症の患者を道内の各医療機関に依頼して成長ホルモンの治療効果を検討することにしました。これが下垂体機能障害の研究の始まりです。附属病院が完成した後も、前葉ホルモンとその標的器官の機能を年齢を追って検討しているうちに、否応なしに思春期の内分泌に手をつけることになりました。昭和54年から55年にかけて文部省在外研究員として、小児内分泌学の発祥の地ジョージ・ホプキンス大学で研究することが出来ました。このとき連続採血ポンプを使用してホルモン分泌リズムを解析することを思い立ち、その後現在に至るまで下垂体ホルモンの分泌リズムの面から、下垂体機能障害と思春期の

内分泌環境の研究を続けています。

研究の話はこの位にして、小児科学講座を担当する立場から、小児医学についての考えを述べたいと思います。旭川医科大学で小児科学の講義の一部を担当するようになって以来、毎年最初の時間に次のような話をするようにしています。

.....

「子どもは大人を小さくしたものではない」とは小児科の存在意義を説明する名文句として教科書にも載っているが、どうも賛成しかねる言葉である。成人の診療を行っている医師が、小児を前にして自戒する言葉ならば納得できる。しかし、大人について十分な知識のない小児科医は、「大人を小さくしたものではない」といわれても困惑するばかりではある。動物学の教科書に「おたまじゃくしは蛙を小さくしたものではない」と書いてあれば、冗談と受け取るだけである。それでは、子どもは何であると言えば良いのか。「子供は大きくなって大人になる」のである。これは子供から大人へ連続的に変化する成長発達の過程を考慮した言葉である。大きくなって大人になるということは、時間の経過と共に体が大きくなるだけでなく、体型が成人型に変化し、知能・精神も発達することを意味している。したがって小児科医のなすべきことは、単に小児を医療行為の対象にすることではなく、各個人の将来を念頭に置きながら、成長発達の障害になる因子を可能な限り取り除くことであろう。

.....

小児医学をどの様に考えるかについては、小児科医の間でも多少の違いがありますが、私は「ヒトの成長発達」を取り扱うのが小児医学であると考えております。旭川医科大学小児科では共通課題を「成長発達」として、今後の診療・研究活動を発達させたいと願っております。



第24回日本小児内分泌学会を開催
(平成2年10月12,13日、於：旭川市)



着任にあたって

社会学助教授 松岡悦子

この9月より、笹森先生の後任として一般教育の社会学を担当することになりました。どうぞよろしくお願致します。

私は大阪で生れ、大阪大学で文化人類学を専攻した後、夫の北大就職に伴い、札幌に移ってまいりました。移った最初の年は、北海道には日本の四季がなく、夏と冬の2つしかない、ずい分物足りなく思いましたが、今では北海道の夏（と冬ですら）の恩恵を存分にうけています。旭川に来るまでの2年間、私は家族（夫1人、子供3人）と共に、ロンドンとミュンヘンで1年間づつ生活し、日本の国や研究スタイルを外から見の機会に恵まれました。そこで印象に残った1つのことは、普遍的とされている自然科学が、国によってその研究スタイルが違い、また時代や政治状況によって、研究内容が取捨選択されていること、いわば自然科学が社会・文化の産物として存在することでした。また、夫は神経生理学を研究していますが、その夫を通して見る各国の研究者たち（その食べ物からレジャーの過ごし方、家庭生活の持ち方まで）と、その研究者たちが産み出す「科学」とを、社会学や人類学の視点からとらえてみることで、つまりどのような人々がどのようにして科学を作っているのかを、研究してみたい気持ちにかられました。これは今後の課題にしたいと思っています。

さて、私の学生時代からの研究テーマは医療人類学です。卒論のテーマには占いを選び、修士論文には日本の新興宗教と修験道での病氣治しを選びました。医療人類学では、さまざまな社会（文字を持たない社会から先進国まで）の病氣や健康にまつわる考えや行動を扱いますが、私はずっと医療以外で病氣が治ることに関心を持ってきました。人類学や社会学は実際の現地調査でデータを集めますので、学生時代は色々な教団に通って行者や祈祷師に会い、いっしょに修行をさせてもらったりしたので、年寄りの信者からは「若いうちから手合わせてえらいねえ。そやけどお父さんやお母さんはいてはるの？」と身の上を案じられたりもしました。実際に人々の中に入って調査をする時、女性であることは有利なことが多く、その点からも人類学には女性が多くいます。医療人類学や医療社会学という名前はあまり知られていないかもしれませんが、欧米では人気が高く、担い手となるのは、人類学・社会学出身者、医師、看護婦などです。人気があるとはいえ、医学の主流からみればもちろん周辺の領域ですので、医療人類学に関心のある医師は日本で

は精神科や公衆衛生の方、あるいは非常にユニークで個性的で、かつマージナルな位置にある人たちのようです。また、政策担当者や外交にたずさわる人、海外医療協力に従事する人たちも医療人類学には関心を寄せています。このマージナルであることは、人類学をやっていく上ではとても重要なことでして、（女性はすでに社会的にマージナルな存在です）文系の社会学者や人類学者と共通の土俵で医学について語り合うためには、マージナルで境界線上にいるような医師の存在が不可欠になります。私個人の印象ですが、イギリスでもドイツでも、医療人類学をやっている医師はとても人間的魅力のある人たちでした。例えば、自分の医院での診療場を調査対象にして論文を書いている人、慢性病の患者は初期の医者一患者関係に問題があったのではないかと研究していた人、またニューギニアやインドネシアで現地人の治療を見たり、現地の病院で働いていた人など、非常に広い視野とおもしろい話題を持った人たちでした。そして私自身はといえば、このような寛大な医師たちのおかげで、イギリスやドイツの病院で医療人類学的な調査をさせてもらえたわけです。

ずい分医療人類学の紹介ばかりしてきましたが、私としましては、是非、医師や学生の方々、また製薬会社その他、病氣と健康に関心のある方たちと、研究会を持ちたいと思っています。医療人類学は、やはり医療の現場との接触があってこそ活気が出、より実り多いものになると思うからです。最近私にも、民間治療より「ある普遍性」を備えた現代医療に魅力を感じるようになってきましたので、関心のある方々、是非御連絡下さい。お待ちしております。



フランスのスキー場にて
(末っ子はスキー場の保育園で写っていません。)

解剖学実習を終えて

第3学年 金子 登

医学部に行くというと、多くの人々が解剖を連想する程、医学部にとって解剖は医学部の“顔”的科目である。旭川医大に入学して、3年目のこの実習のときに、医学をやるのだと実感する人も多いことだろう。

解剖実習を通して、自分が感じたことを思い浮かぶままに書いてみたいと思う。

4月10日、まだ肌寒い春の午後、緊張した面持ちで解剖体の傍に立っていたのは私だけではなかっただろう。医者になる為とはいえ、かつては私達と同様に生きていた人々の体にメスを入れるのは、世の中の常識とはかけ離れた行為であるという感が強かった。その為か最初の1~2週間は、なかなか実習に集中することが出来なかった。死とは、人生とは何なのかなどということに思いが自然に流されていった。しかしそのような思いも度重なる実習に伴う毎日の予習と定期的に行われる試験という現実、次第に影を潜めてしまった。

実習前には、3ヶ月もかけてこのような系統的な解剖を行うのはこれが最初で最後の機会であるだろうと思っていたから、しっかりと頭に刻みつけ見ておこうと心に決めていた。しかし、実際にはテキストに書いてあることとの照合や同定の作業にほとんどの時間をとられてしまった。十分に見る時間がないのを痛切に感じた。もっ

と時間があれば、生理的、臨床的な意義も考えながら実習を行うことができ、更に効果的だったのではないかと思われた。しかし、実習時間は限られているので、要領よく手際よく行わなければならないということも実習を通して感じたことであった。

私事ではあるが、私には献体に登録している祖母がいる。彼女が献体することに抵抗はないのかと誰かに聞かれたときっぱりと医学の進歩の為に喜んで献体するとの話を聞き、医学を学んでいる自分よりも、ずっと医学の発展に寄与したいという情熱を祖母が持っていることを知り顔の下がる思いであった。そして同時に、私達の解剖の実習の為に献体して下さった人々も、私の祖母のような気持ちで献体されたと思うと、感謝の念を感じずにはいられなかった。

実習を終えて再び、生きることを考える上で、人生の最後に献体として自らの体を差し出して下さった愛にも似たその行いは、自分自身の生きる上にも非常に大きな影響を与えてくれたと思う。

この実習を通して得られたこと、感じ、考えさせられたことを生かすことが出来るような医者になりたいと思う。そしてそのような気持ちをいつまでも持ち続けたいと思う。



解剖学実習を終えて

第3学年 青木 直子

初めて解剖実習室に入ったとき、実習室にあふれる明るい静けさと、日の光り、そして壁の白さが目に焼きついて離れなかった。あれからもう、半年以上がたとうとしている。

解剖実習は実に淡々と静かに理路整然と行われた。この世界をすでに一歩離れた方々と、教えを乞う私たちとの、死と生がある親密さをもって共存している不思議な場であった。今、私の手元には26枚のスケッチがある。これらは、いわば私と御遺体との対話の記録である。スケッチの一枚一枚を見返す度に、記憶の底からそのときの実習の内容が鮮やかによみがえってくる。

御遺体は無言である。しかし私たちは実習を通して声なき声を聞く。人間というものが、どのようなパーツから成り立っているか、いかに精巧に組み立てられているか、実際に自分の手を通して学んでいく。よく、人間を『もの』と思わなければ解剖はできないということを目にする。解剖実習を続けていくうちに人間が『もの』に見えてくるとも聞く。だが、実習を終えた今、そのようなことはないと思ってしまう。どんな小さな骨片や組織になろうともそれらはやはり、人間としての尊厳を決して失ってはいなかった。私たちは解剖実習から、単なる人体に関する知識だけを学ぶのではなく、それ以上に『生

と死』についても深く考える機会を与えられた。実習から触発され、感じたことは一人一人違うだろうが、あの実習期間中は誰もが、人間の一生を通しての、生きるということ、死ぬということの意味に対して真摯な姿勢でのごんごんしていたように思う。

医学という果てしない道の、丁度門をくぐった私たちを、そのつたなき、未熟さも含めて御遺体は常に暖かく見守り、導いてくださった。3カ月にわたる間、もっとも近しい友人であり、親であり師であったと感じる。生前の御姿は知らなくとも、私の中では一個人の人格をもって御遺体は存在している。そしてそれは、生きていることと同義なのである。多分私が御遺体に対しての記憶をなくさない限り御遺体は私とともに生き続ける。私がこれから医の道を歩む上で常に、大きな戒めとなり道標となることであろう。

私たちはできるかぎりの努力と誠意をもって解剖実習を行ってきた。実習は終わったが、ここからが私たちのまたあらたな出発となる。理解と信頼をよせていただいた御遺体の方、生の側から惜しみない指導をしてくださった先生方に、深い感謝の念を禁じえない。そして何よりも今は亡き方々の御冥福をお祈りしつつこの文の終わりとしたい。

体育大会4年生が優勝!

去る9月5日(木)快晴の秋空の下、学年対抗の体育大会が開催されました。ビールとコンパ券を懸けて全種目で激しい争いが連続し大いに盛り上がりました。

各種目と各学年の成績は次のとおりです。

(学生課)

学年	サッカー	バレー	ソフト	綱引き	リレー	駅伝	合計	順位
1年	0 キケン	0 キケン	0 キケン	10 (1)	7 (2)	3 (4)	20点	4位
2年	7 (2)	10 (1)	5 (3)	5 (3)	5 (3)	5 (3)	37	準優勝
3年	2 (4)	2 (4)	2 (4)	0 キケン	0 キケン	0 キケン	6	5位
4年	10 (1)	7 (2)	7 (2)	7 (2)	10 (1)	10 (1)	51	優勝
5年	5 (3)	5 (3)	10 (1)	2 (4)	3 (4)	7 (2)	32	3位

()は順位



解剖体慰霊式

平成2年度解剖体慰霊式が、9月19日(木)午後1時30分から本学体育館において執り行われました。

式に参加した御遺族・御来賓・本学教職員・学生は、本学の教育及び学術研究のために尊い御遺体を提供され、医学発展の礎石となられた136名(病理解剖58名、法理解剖46名、系統解剖32名)の方々の御遺徳を偲び御冥福を祈念しました。

(庶務課)



「公開講座」好評を博し終了

本年度の公開講座「家庭における救急処置(救急医療)」が10月2日から30日の期間に9回にわたり、実施されました。

本年度は救急蘇生術の実習を計画したところ、市民の関心が高く、昨年を上回る260名の申し込みがあり、受講者は終始熱心に聞き入り、好評の中無事終了しました。

(学生課)

○開講日程及び講義題目

日	程	講義題目	講師
第1回	10月2日(火)	(開講式) 熱傷(やけど)の 救急処置	副学長 安孫子 保 医学部皮膚科学講座 教授 飯塚 一
第2回	10月11日(木)	(1)中毒と救急医 学 (2)急性中毒	副学長 安孫子 保 旭川赤十字病院 薬師長 三浦 格
第3回	10月12日(金)	心臓病の救急処 置	市立旭川病院 院長 柴田 淳一
第4回	10月18日(木)	脳神経の病気の 救急処置	旭川赤十字病院 第1層部長 高村 春雄
第5回	10月22日(月)	緊急外科処置を 要する腹痛	市立旭川病院 診療部長 熱田 友義
第6回	10月25日(木)	女性と腹痛	医学部産婦人科学講座 教授 清水 哲也
第7回	10月26日(金)	子供の病気と救 急処置	医学部小児科学講座 教授 奥野 晃正
第8回	10月29日(月)	救急蘇生1 (講義及び実技)	医学部麻酔学講座 教授 小川 秀道 旭川赤十字病院 麻酔科長 表 哲夫
第9回	10月30日(火)	救急蘇生2 (講義及び実技)	医学部麻酔学講座 教授 小川 秀道 旭川赤十字病院 麻酔科長 表 哲夫

新入生研修(第2回目)

新入生研修(第2回目)が10月29日(月)・30日(火)・11月1日(木)・2日(金)に行われました。

第1学年全員を8グループに分け、1グループに教授2名(一般教育1名、基礎・臨床1名)が指導にあたり、①前期試験終了後における就学上の諸問題、②学生生活上の諸問題などを中心に研修が行われた。

(学生課)





留学生寄稿

旭川医科大学での生活

アブ・ナサール・エサヌル・ホーク

まず初めに、私の母国であるバングラディシュと、私自身について簡単に紹介したいと思います。バングラディシュはインドの東に位置しております。バングラディシュの歴史は、希望と争いと、そして愛とでつづられたタペストリーのようなものであると言えると思います。バングラディシュは1971年に、長い間の人々の夢であった独立をしました。バングラディシュの人々は素朴で、誠実で、また親切です。さらにある詩にうたわれているように、バングラディシュの人々は、人々をとりまくロマンチックな風景のように、情緒的であると思います。バングラディシュと日本とは、すでに長年友好関係を結んでおります。

私はバングラディシュのラデュシャビという市にあるラデュシャビ医科大学を1988年に卒業しました。その後首都ダッカの小児科病院で勤務していましたが、基礎研究に興味を持つようになりました。そこで研究雑誌でお名前を知っていた安孫子先生に、手紙を書きました。安孫子先生は私を受け入れて下さり、また文部省の奨学金を受けられるようにして下さいました。

私が旭川に到着した今年1月22日は、とても寒い日でした。その日の気温は零下25℃だったそうです。飛行機の窓から見える景色は白一色で、町らしいものは全く見えませんでした。私は大変驚き、旭川での新しい生活が大変心配になりました。しかしその心配は杞憂に終わりました。安孫子先生と市原先生が、空港まで迎えに来て下さっていました。私は旭川の寒さにすぐ慣れて、薬理学講座で研究生生活を始めることができました。今私はラットの心臓をもちいて、虚血心臓の脂肪酸代謝についての基礎実験を重ねています。またいくつかの抗狭心症薬をもちいて、虚血による脂肪酸代謝に及ぼす薬物の作用についても、実験したいと思っています。

旭川医科大学で勉強するのにあたり、私は少しも不便を感じていません。といいますのは、薬理学講座の方々が皆大変親切で、いろいろな面で私を助けて下さっているからです。ただ少し残念に思いますことは、旭川医科大学には、外国からの留学生が少ないことです。もし、もっと多くの留学生が旭川医科大学で勉強するようになれば、さらに国際的な大学になるのではないかと思います。

旭川は大変すばらしい町だと思います。旭川はごみごみとしておらず、生活するのにも勉強するのにも大変適していると思います。また私は旭川の自然環境にも魅せ

られています。特に旭岳の美しさに魅せられています。私は時々薬理学教室の窓から旭岳をながめますが、まるで私の友人のように感じるがあります。私はまた数回スキーをしました。もちろん、まだそれほど上手に滑りませんが、スキーがすっかり好きになりました。旭川で一番好きなものは、雪とスキーです。今年の冬にまたスキーをするのを、楽しみにしています。

私は旭川で何人かの友人と出会うことができました。旭川の人々は大変親切です。人々の生活は一般に東洋的であると言えます。その価値観や死に対する観念の根底には、日本の神話があるように思います。しかし一方、旭川の人々の社会的、職業的な生活は大変モダンです。私は旭川で親しい友人に出会うことができ、大変幸せです。

私は旭川医科大学の薬理学講座で、勉強できるチャンスを得ることができて、大変好運だったと思います。今私は、よい実験データが得られるように、ベストをつくして研究に励んでいます。私はこのすばらしい経験を、将来バングラディシュに帰ってから、さらに私自身の研究の仕事に反映できますことを、心から望んでおります。

আবু নাসারুল প্রসানুল হক

生年月日 1964年3月13日生
所 属 薬理学講座
在籍期間 1990. 1. 21~1991. 3. 31
国 籍 バングラディシュ
留学前の最終職歴 バングラディシュ小児科病院研究員(医師)



研究室紹介

■ 法医学講座 ■ 福島 亨

現在、教室のスタッフは石橋教授、福島助手、中野助手、中大路事務官の4名であるが、福島、中野助手は共に本学出身でチームワークは抜群で、和気藹々とした教室である。

教室の研究テーマは①法医個人識別学、②法医病理学③高温および低温下の法医形態学、④骨の人獣鑑別学などが主なものである。

法医個人識別学の中で一番力を入れているのはスーパーインポーズ法である。これは身許不明の白骨死体の個人識別に利用されるもので、該当者の生前顔写真と頭骨を重ね合わせて、丁度顔面のレントゲン写真のような像を作成し、その合致性によって特定個人を同定する方法である。この両者を重ね合わせる操作は、昭和54年に開発した電動式頭骨移動撮影装置で行う。この装置を用いて、昭和56年夕張で発生した炭坑爆発事故によって坑内に閉じ込められ、6カ月後に搬出された15名の坑内員の個人識別を7時間余りで完了することができた。今後とも合致条件の研究、装置の改良等が期待される。

法医病理学に関する研究は、病理部組織の死後変化、腐敗嬰兒死体の有気、無気肺の鑑別など、従来組織学的

診断が不可能とされていた分野に法医学的な目を向けようとするものである。

高温および低温下の法医形態学に関する研究は、異常温度下における生体および死体がどのような影響を受けるかを究明するものである。例えば、爆発の際に火焰が発生したかどうかを毛髪の変色で判断し、事故の様相を究明できる。この基礎実験は昭和58年サハリン沖で墜落された大韓航空機の遺体を解剖・検屍するに当って非常に役に立った。

骨の人獣鑑別学に関する研究は、高温下で灰化、粉末状となった脆弱性が高度な骨からハーヴァース管を検査することから始めたが、長期間地上、土中、海中にあった骨なども対象としている。これまでに判ってきたことは、ハーヴァース管の構造は高温、腐敗、死後長期間経過等の条件下においても意外に保存されていて、人獣鑑別は比較的容易に診断できるということである。

その間、中大路事務官は組織標本作製を手伝い、その他実験器具の整備、事務、オヤツ作製等々研究活動の裏方を熱心につとめてくれている。

なお、臨床講座の外来に相当する鑑定業務は、平成元年に例をとれば、司法解剖53件、白骨鑑定8件、物体鑑定3件、親子鑑定1件、検屍19件等である。

(法医学講座 助手)

研究室紹介

■ 皮膚科学講座 ■ 松本 光博

昭和51年大河原教授のもとで開講された皮膚科学講座は順調な発展を続け、道北地方の皮膚科の基幹病院としての責任をはたしております。

研究対象は当初、表皮の生化学的な研究、とりわけ糖代謝系の研究が中心で、尋常性乾癬の糖代謝で業績を残してまいりました。昭和61年飯塚教授が教室をひきつがれてからも、尋常性乾癬が当教室のメインテーマであることには変わりはありませんが、表皮細胞の増殖分化をより多岐にわたって検討するようになってまいりました。

飯塚教授、松尾講師、坂井助手は表皮の Adenyl cyclase 系の反応性を検討しており、今までも多数の発表があります。とりわけ飯塚教授は現在でも自ら試験管をふるって精力的に研究を行っております。

筒井助手は表皮 GTP 結合蛋白質の動態につき検討を加えており、新発見も得られております。広川助手は表皮増殖細胞における phospholipase A₂、phospholipase C 活性の変動について検討しております。橋本助手は flow cytometry を用いて皮膚腫瘍や表皮増殖の動態について検討しております。

高橋助手は大学院卒業後も遺伝子工学的手法を用いて、第2病理学講座と共同で尋常性乾癬における癌遺伝子の発現について研究しております。豊田助手も本年大学院を卒業したばかりですが、皮膚肥満細胞に対する紫外線

の影響を検討するかたわら、第1病理学講座と共同で、皮膚の癌化につきまして遺伝子レベルで検討しております。

松本、佐藤助手、小林研究生は主に形態学的な研究に従事しており、蛍光抗体法、酵素抗体法、電顕、免疫電顕法を用いて臨床研究を行うとともに、松本は抗基底膜抗体に対する monoclonal 抗体の作製、小林は抗 superoxide dismutase 抗体の皮膚疾患における局在についても検討しています。

最後に皮膚科独特の伝統的な研究分野である真菌感染症につきましては藤井助手が真菌の培養と同定にあたり、北海道における皮膚真菌症のセンター的役割をはたしています。

当教室は以上述べましたように一貫して表皮細胞の分化、増殖のメカニズムを追及してきましたが、最近では基礎の講座の御協力もいただき開口をひろげてきております。今後もこのテーマを医局員一同、追究していく所存です。
(医局対抗野球で2連覇中の野球部)



教官の異動

採用

◎ 松岡 悦子 2. 9. 16 社会学 助教授

◎ ジョージ・メリディス・ウィックステッド

George Meredith Wickstead

2. 10. 1 英語 外国人教師

昇任

◎ 三代川齊之 2. 11. 1 病理学第二講座 講師
任期満了

◎ マーク・ナタン・ウィードン・ニューズテッド

Marc Nathan Weedon-Newstead

2. 9. 30 英語 外国人教師

スキー教室締切り迫る

今月10日で申し込みを締切ります。定員にまだ余裕があるので参加希望者は学生係まで申し込んで下さい。

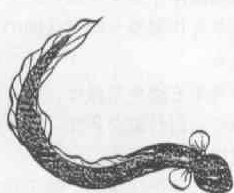
(学生課)

全道学生弓道新人戦本学で開催される

第22回全道学生弓道新人戦が11月4日(田)本学体育館で21大学延べ300人が参加して開催された。

本学の弓道部は団体で3位と善戦し、個人でも2年生の黒島研美が3位に入賞するなど好成績を残した。

(学生課)



外 怨

八幡 剛浩

沈性卵と浮性卵、そして β_3 リセプター

落語の3題話めいて恐縮であるが、蒲焼でお馴染みの鰻は身近な割に謎に包まれた魚である。鮭とは逆に海に降って産卵するが産卵場所がどこなのか永らく判らなかつた。鰻は魚でありながら変態をする。変態前の仔魚はレプトセファルス(葉形仔魚)と呼ばれ、その名の如く葉の様に扁平でしかも半透明であり親とは似ても似つかない姿をしている。この仔魚を約30年にわたって追いつけたのがデンマークの Johannes Schmidt である。その情熱と根気には只々敬服するばかりであるが、彼はついにヨーロッパとアメリカ産鰻の産卵場所がバミュエグ海域である事をつきとめたのである。日本の鰻は宮古島南方の琉球海溝海域で産卵すると推測されている。この仔魚は500m以浅ではほとんど捕えられていないところから鰻は深海で産卵するものと信じられている。とここまでは御存知の方も多い事と思われる。さてここでもう一人の鰻研究者を御紹介したい。それは昭和48年に世界で初めて鰻の人工孵化に成功された故北大名誉教授山本喜一郎先生である。当時私は大学院生として先生の教室に在籍して居り、成功に至る道程を垣間見る事が出来た。先生は、鮭の脳下垂体を鰻に注射して卵を人為的に成熟させ、それを人工受精によって孵化させるという実験を行ったのであるが、無論様々な問題を乗り越えねばならなかつた。中でも実験の成否を分ける事になった点の一つをお話したい。先に書いた様に鰻は深海で産卵すると信

じられているが、もしそうなら卵は鮭の卵の様な沈性卵(沈む卵)であると考えられる。しかし産れた卵は何と浮性卵(海面に浮く卵)であったのである。この事は鰻の産卵場所は深海ではない事を、又、仮に深海で産卵するにしても卵発生が進むのは海面域であろう事を示している。そこで先生は卵発生を起させる為の温度を鰻の産卵海域の海面水温に設定された。実験は美事に成功し、鰻の稚魚が初めて人前に姿を現わしたのである。

話は変わって、当教室のメインテーマとして追っている褐色脂肪組織-寒冷馴化時に充進する非ふるえ熱産生の場一の機能の主調節因子はノルアドレナリンであり、その作用経路は β_1 アドレナージックリセプターであると信じられている。一方近年脂肪細胞には β_3 サブタイプのリセプターの存在が示唆されているが、その生理的な意義については少くとも昨年夏の国際生理学会迄は今一つはっきりしていなかつた。ところが先日神戸で開かれた国際肥満学会に出席して驚いた事に、この1年余りの間にこの研究分野での世界の趨性は、褐色脂肪細胞へのノルアドレナリンの主作用経路は β_3 リセプターであるという方向に変わっていたのである。

この全く関連のない2つの事実が夫々に示唆するところは多いが、共通して言えるのは定説というものも常に正しい訳ではないという事であろう。これは科学の歴史が証明しているところであるが、先の鰻の実験でも、もし深海で産卵するという定説に固執して実験水温を深海域の温度に設定していたら人工孵化成功の栄誉は誰か外国の研究者の物となっていたに違いない。 β_3 リセプターの動向についてはもう少し先行きを見極める必要があるが、これも定説を覆す事になるものと予想される。予期しない実験結果が出た時にそれを生かせるかどうかは、ひとえに研究者の洞察力にかかってくるであろうが、先の2つの体験に刺激され、私も今その背後に在る物を読み取る為ネガティブデータを眼を大きく見開いて見直しているところである。

(生理学第一講座 講師)